# セカイにひとり　中（一）

麦（穀物P）

# 目次

第一部　セカイにひとり　中（一）…………………… 3
第四章　ストーカーしてたら銃を突きつけられて尋問された自称姉 4
第二部　ラビットハウス新年ぱやぽや日記………………… 85

# 第一部　セカイにひとり　中（一）

# 第四章　ストーカーしてたら銃を突きつけられて尋問された自称姉

(World Line Kigumi-F to Kigumi-E via Rize)

今、リゼちゃんに背後から何かを突きつけられている。脇腹に棒のようなものが押し付けられていた。視線をそちらにやると、モデルガンのようなものだった。動いたら撃たれちゃうかもしれない。どうしてこうなってしまったんだろう……

「手を上げろ」

その言葉にぶるぶる震えながら従い、両手を上げた。

「まじゅつ」を成功させた次の日、私はうずうずしながら放課後を待った。私の知っている人が自分の近くに帰ってきた、それだけでとても嬉しかったんだ。ここのリゼちゃんは何歳なんだろう、自分がもともといたセカイと同じ、高校を卒業して大学生になろうというときだろうか、それとも高校生だろうか、まさか中学生なんてことはないよね。いずれにしても、リゼちゃんのことはすぐに見抜けるし、すぐに見つけてみせる。その意気込みで街に駆け出した。

リゼちゃんはすぐに見つかった。手ぶら、そして私服で街を散歩していた。ロゼちゃんの格好ではなく、見慣れたツインテール姿だった。話しかけるタイ

ミングを探そうと後をつけていて、でも突然いなくなっちゃった。
「あれ？　リゼちゃんどこ？」
きょろきょろ探していたら不意に路地裏に引っ張り込まれちゃって、そして今に至る……ココアお姉さん（仮）の言っていた通りになっちゃった……
「貴様、名前は？」
「コ、ココアですっ」
「ココア……聞かない名前だな。その制服、向こうの高校か。それで、何の用だ？」
「あ、あのねリゼちゃ……」
「振り向くな。どうして私の名前を知っている。さてはスパイか」
脇腹に押し付けられたモデルガンの圧力がさらに強くなりぐりぐりと動く。
このままだと本当に撃たれてしんじゃうかも……

「こ、ころさないで……」
「貴様の振る舞い次第だな」
「ひっ」
リゼちゃんの低い声が恐ろしい響きとなって耳に届いた。絶体絶命。
その後すぐに、少しだけ警戒感が薄くなった感じの声で尋ねられた。
「冗談だ。さすがに命を取ったら私がお尋ね者だ。それで改めて聞く。何の用だ？」
「あ、あのっ、ちょっと聞いてもらいたい話があるの。それで、ちょっとお付き合いしてくれないかなって……」
「新手の宗教勧誘かなんかか？」
「宗教じゃないよっ」
リゼちゃんの声が訝しげなものに変わり、銃を押しつける力が少し緩んだ気

がした。少し道が開けたかもしれない。あとはどうにかしてあやしい勧誘ではないことを信じてもらって、それで……

「まあいい。だがその前に調べさ――」

リゼちゃんが何かを言いかけたとき、不意に体から力が抜けた。あれ……？なんか目の前がぼやけてきた……

「おいユラ待て、いきなり実力行使はまずい。武器をおろ――」

抱きかかえられる感触を最後に、視界が真っ暗になった。

「――はっ」

「気づいたか」

気がつくとちょっとファンシーな部屋のベッドの上に寝ていた。いつの間に気を失っていたんだろう。体を起こすと、横にはリゼちゃんが座っていた。

「すまない。うちのボディーガードのせいだ。これは私のせいでもある。本当は安全に解放するつもりだった」
「私、生きてる……？　ここはどこ？」
「私の家だ。不始末で傷つけた人を街に転がしていくわけにはいかないからな」
本当にすまなかった。リゼちゃんはそう言って深く頭を下げた。
「そんな、リゼちゃん頭を上げてよ」
「……お前が私の名前を知っている理由はいまだわかっていないが、保登心愛」
頭を上げ、こちらを見据えたリゼちゃんが突然私の名前を告げた。どうして知ってるの。
「保登心愛、十六歳。高校一年生で、高校に上がるときにこの街にやって来

た。喫茶店『ラビットハウス』を営む香風邸に下宿している」
「ひょっとしてリゼちゃん、」
リゼちゃん、なにか思い出してくれたのかな。その期待はすぐに打ち消された。
「名前は学生証を見た。そこから先は親父の伝手で少し調べさせてもらった。自分で言うのも変だが、怪しい組織に誘拐されたりしたら困るからな」
「そう……私のことを知ってたわけじゃないんだね……」
「ああ。知らないな。今はまだ」
やっぱり、リゼちゃんは私のことを覚えていなかった。そのことを改めて実感して、寂しい気持ちになった。でも、仲良くなるチャンスはあると分かった。さっき、リゼちゃんは「今はまだ」と言ってくれた。少しだけでも話を聞いてくれそうだった。

「何か話があるんだったな。今からでも一応聞くぞ」
「その……ちょっと込み入った話になるから、多分今から喋ると夜になっちゃう、かな」
「そんなに長いのか!?」
「うん。だから今週末にでも、どこか喫茶店で話ができないかな」
リゼちゃんはしばらくあごに手を当てて考える様子を見せ、そして私の方を見て告げた。
「ラビットハウスにお邪魔しよう」
「いいの？」
「ラビットハウスのマスター、タカヒロさんは親父の戦友だそうだ。へたに変わったところに行くより安全が保証されそうだと信頼できる」
「そうだったんだ……」

「夜までかかりそうな話がなにかはわからないが、お前は私のことを知っていそうな感じだというのはとりあえずわかる。どこまで私のことを知っているか、その時に聞かせてもらうとしよう」

無事週末にラビットハウスでリゼちゃんとの会談を取り付けて、今日のところはお開きとなった。リゼちゃんに連れられて部屋を出ると、本当にお屋敷みたいな造りだった。記憶を取り戻す前に家の前を通りかかったときのことを思い出した。あの時は門のそばに立っていた怖い感じの男の人たちに気遣われたんだった。そして今回も気絶した状態で運び込まれたのを知っていたのか、また気遣われた。

「お嬢さん良くなられたんですかい」

「良かった良かった」

この感じ、私が気絶した原因を知らされていないみたいだね……まあいっ

か。リゼちゃんに見送られてラビットハウスへの帰路についた。帰りが遅かったことをサキさんにだいぶ心配されたけど、本当のことを言ったらますます心配されちゃうから言わなかった。ちょっと街めぐりにはまっていたことにした。

火曜日、ラビットハウスに青山さんが来る日だった。リゼちゃんがいる世界になってから青山さんと会うのは初めて。

「青山さんこんにちは！」

「こんにちは～ココアさん。今日もお邪魔しています～」

自分の部屋に荷物を置いて、制服のままお店の方に戻る。ほどなくして、ドアの開く音がした。

「お邪魔します」

「ようこそリゼちゃん！」
「いきなり馴れ馴れしいな」
「……ごめんなさい」
リゼちゃんに怒られちゃった。そうだよね、こっちのリゼちゃんは私のことを何も覚えていない。本当の初対面だったらもうちょっとフランクな感じにできたんだけど、いつも仲良しのリゼちゃん相手と同じように接しようとして、でも何も覚えていないリゼちゃん相手だとちょっと接し方が難しくて、どうしたらいいのかわからなかった。
「いや……すまない。こっちが悪かった。泣きそうな顔をしないでくれ」
どことなくぎこちないまま、お互いテーブルについた。タカヒロさんが注文を取りに来てくれて、ふたりともオリジナルブレンドを頼んだ。
「それで、だ。保登心愛……ココアでいいか？」

「うん。私の知ってるリゼちゃんはそう呼んでくれてたから」
「『私の知ってる』、か。なんか大変な話になりそうだな」
リゼちゃんが苦笑して、話を進めた。
「さて、まずはお互い自己紹介と行こう。いかなる交渉も相手のことを十全に知ることが大事だからな。私は天々座理世、十八歳。今年大学に進学したばかりだ。高校はこの街の私立学校で、そうだな、ほかの高校の生徒からは「お嬢様学校」とか呼ばれたりしているところだ。……まあ、優雅さは私の性分にあまり合わないところもあるが、いい学校だよ」
「保登心愛です。このセカイでは十六歳の高校一年生。実際は……五月だからもう十八歳の高校三年生になってるかな。高校は……学生証見たんだっけ」
「見た。しかしこのセカイでは十六歳で、実際は十八歳とか、まるで未来人がタイムスリップしてきたみたいな言い方だな」

「もしかしたら、未来人……というより、異世界人みたいなものかもしれない」

「にわかには信じがたいな」

コーヒーを一口。リゼちゃんの目には困惑の色が浮かんでいた。自分がこのような話を聞かされたら絶対作り話だと思うに違いなかった。でもこれは本当の話で、リゼちゃんにはそれを信じてもらう必要がある。信じるだけじゃなくて、さらに元のセカイの記憶も思い出してもらわないといけないんだ。

「それで、どこから話をしようかな」

「まずは、ココアが知っている私の話をしてくれ。その私がこの私と同じか違うかはさておき、興味がある」

「わかった」

私が覚えているリゼちゃんとの馴れ初めを話し始めた。木組みの街に来てラ

ビットハウスを訪れ、働き始めたその日に更衣室で衝撃的な出会いをしたこと。あのとき、初対面で下着姿のリゼちゃんにいきなり銃を突き付けられた。今思い出すと、あやしい泥棒さんっぽい人に「あやしいやつめ」と言われるおかしさに笑いが込み上げてくるけど、あのときは本当にびっくりした。

「初対面で銃を突き付けるとか、いったいそっちの私は何をしたんだ」

「あやしい人だったから警戒したって言ってたよ」

まるで教官みたいな感じだったけど実はとてもやさしいこと。CQCの達人なこと。

「ま、まあ、達人だなんてそんなことはないぞ。親父に少し習って、自分でも少しは身を護れるようになれたらと思っただけだ」

「戦うレディって感じですごいなって思ったよ」

「照れるな……ほめたって何も出ないぞ」

リゼちゃんの顔が明らかにほころんでいた。少し仲良くなれたかな。

さらに話が広がった。お裁縫が得意で、ワイルドギースと言う名前のうさぎさんのぬいぐるみを作っていろいろな人にプレゼントしていること。小学校の先生になるのが夢なこと。

「ココアと私はだいぶ仲が良かったみたいだな。ワイルドギースはお気に入りなんだ。そして小学校の先生になる夢というのは、まわりにはあまり話したことはなかった。親父に笑われたときには喧嘩してしばらく口を聞かなかったくらいだしな」

「うん！　他にもいろいろ知ってるよ！」

実はかわいいものが好きで、時には本当のお嬢様っぽいロゼちゃんになること。

「なっ、どうしてそれをっ、やはり貴様スパイだな？　どこの所属だ？」

リゼちゃんの目つきが鋭くなり、右手が何かを取り出すように腰に回った。
「ス、スパイじゃないよ！」
「だってロゼのことだけは誰も知らないはずだ。……しかし、それを知っているということは、ココアがただ者でないことを表しているといえるかもしれないな……」
幸い、危機は去ってくれたらしい。ここまでの話で何か思い出してくれたかな。
「どう？　何か思い出した？」
「……すまない。私にはよくわからない」
結構いろいろなことを話したけれど、まだ記憶を取り戻すきっかけにはなっていないみたいだった。
「私以外にも共通のお友達がいるんだよ。和菓子屋さんの看板娘の千夜ちゃ

ん、頑張り屋さんのシャロちゃん、かわいい後輩のマヤちゃん、メグちゃん……そしてチノちゃん。どう、かな？」

「……まるで心当たりがない」

「そっか……」

やっぱり、そう簡単にはいかないのかもしれない。そう思って、この先どのようにして記憶を取り戻していけばいいのか、少し考えはじめたところで、リゼちゃんがもじもじしながら口を開いた。

「初対面の相手に言うのも少々ばつが悪いんだが、その、私には友達がいないんだ……」

「いないの!?」

思わず驚きの声を上げた私に対して、リゼちゃんはぎこちなくうなずいた。

「かろうじて友達と呼べそうなのは、幼い頃から一緒のユラ――私のボディー

ガードくらいだな。なんというか、その、中学や高校でもみんなから遠巻きに見られていたというか」

「リゼちゃんの性格と行動的にそうなりそうな気がする」

「お前さりげなく失礼なことをさらっと言うんだな」

リゼちゃんからあきれたような、笑ったような顔を向けられた。

「まあ、正直に言って、ココアの言うことは私にとって心当たりがなさ過ぎて、壮大な嘘をつかれているんじゃないかという考えが先に立ったのは事実だ」

「そうだよね。私だって逆の立場だったら信じられないと思う」

やっぱりいきなり全部話をしたのは失敗だったかな。ヘンな子だと思われちゃったかもしれない。でもこのリゼちゃんこそが、私たちのセカイのリゼ

ちゃんだから、取り戻さないといけないんだ。
「でも、ココアは嘘をつけそうにないなと思っている」
「えっ」
「それに、あんなに尾行がへたくそなやつが上手にスパイをできるはずもない。私について知っていることはもともと知っていたんだろうと思った」
「地味に失礼なことを言われた気がする……」
「まあなんだ、総合的に言うとちょっと不思議成分入りの面白いやつだということになった」
リゼちゃんが笑みを見せた。
「あ、あのリゼちゃんっ」
「なんだ？　まるでお付き合いしてくださいと言われそうな勢いだな。高校時代は時々言われたけど」

「まず、お友達から始めませんかっ」
リゼちゃんは一瞬固まり、少し困ったような顔をして、頬をかいて少し視線をそらしながら言った。
「友達になろうって面と向かって言われたのは初めてだな……その、私でよかったら」
「やった！」
私が差し出した手を、リゼちゃんが握り返してくれた。
ミッション第一段階達成、リゼちゃんとお友達になりました。

「ただいまー。あら、ココアちゃんのお友達？」
「うん、こちらリゼちゃん！」
「ど、どうも」

少しして帰ってきたサキさんにリゼちゃんを紹介した。
「よろしくねリゼさん。……そうだ、リゼさん喫茶店の店員さんとか興味ある？」
「え？　ええ、少し」
「うちで働いてみない？　今、私とタカヒロさんとココアちゃんの三人で回しているんだけど、お客さんが増えて忙しくなってきちゃって」
「リゼちゃん一緒にお仕事しようよ！」
「そうだなー……ちょっと父に相談してみます」
「よろしくお願いするわ♪」
最後はアルバイトの勧誘になってお開きになった。本当は私からお仕事に誘おうと思っていたから、サキさんが勧誘してくれたのはちょっと驚いたけど助かったなあ。でもリゼちゃんのお父さん、アルバイトのお許しを出してくれる

のかな。元のセカイでは私より先にラビットハウスで働いていたけど、どんないきさつで働くことになったか聞いたことがなかった。

リゼちゃんがお店を出ると同時に、サキさんが意味深長な目配せをタカヒロさんに向けてした。

「……さて、タカヒロさん」

「わかった」

すると、タカヒロさんがどこかに電話をかけ始めた。

「もしもし。元気か。こちらの状況はそっちでモニタリングしているからわかっているはずだ。……まさかバレないとでも思ったのか？　まあ店を守ってくれるのなら助かるが」

「あのー、サキさん。ひょっとして」

「リゼさんって天々座さんの娘さんでしょ？　お父さんがタカヒロさんの戦友

ですってね」
「リゼちゃんのこと知ってたの!?」
「いいえ。目元がお母さんにそっくりだったから、もしかしてと思って」
「……お前な、娘との付き合い方が不器用なんだよ。いつまでも鳥かごの中に閉じ込めておくわけにもいかないだろう？　……もちろん、リゼ君の安全は私が保障する……うん、ではよろしく」
タカヒロさんが電話を置くと、こちらに向けてサムズアップ。あっという間に説得成功したらしい。
「よかったわ♪　そうだ、制服のほこりを落としておかなくちゃね。ココアちゃん、リゼさんには何色が似合うと思う？」
「紫、かな」
「じゃあそれにしましょう！」

制服の色は即答だった。リゼちゃんといえば紫の制服。色の組み合わせだけは崩しちゃいけない気がする。サキさんがバックヤードに行った後、窓際の席から青山さんが手招きするのが見えた。

「先ほどお店の外に出られた、長くお話しされていた方がリゼさんですね」

「そうだよ！」

青山さんはいつも通りのほわほわとした声で、なるほど、なるほど～とうなずいた。

「とても凛々しい方ですね～、ココアさんのセカイから来たリゼさんなのですよね」

「うん。元のセカイのことは全く覚えがないみたいだけど」

「そうなんですね。セカイが一緒になっただけでは記憶は戻らないという感じなのですね」

青山さん、鋭い。さすが人間観察が趣味の作家さんだ。

「それでね青山さん、またちょっとお話したいなーって」

「実は私もココアさんからいろいろお話してほしいと思っていたところでした。また先日のレストランにします？」

「いいいいいいいえ高級レストランはおそれおおいです！」

「ではどこかいい喫茶店にしましょうか。土曜日にアフタヌーンティーなどいかがでしょう？」

「じゃ、じゃあそれで……」

「わかりました。サキさんとタカヒロさんにはお伝えしておきますね」

「よろしくお願いします！」

青山さんとのお話し会をまた開くことになった。青山さんが帰ろうとしたちょうどその時、リゼちゃんから電話があって、ラビットハウスで働くお許し

が出たとのことだった。まあ、こちらからタカヒロさんが手を回していたから当然と言えば当然認められるはずだったんだけど、これで正式に決まった。

自分の部屋に戻り、ティッピーを抱きかかえながら、ココアお姉さん（仮）とお話をした。

『リゼちゃんと友達になったんだね！　よかったよかった！』

「うん、でもやっぱり元のセカイのことは覚えてなかったよ」

『そっかー、思い出させるにはやっぱりあれかな、今まで元のセカイで体験したことをそのままなぞるように追体験させるのがいいのかな』

「初めて会ったときからのことをずっとしていく感じ？」

『そうだね。ただ出会い方が違うから、再現とはいっても完全にはできないけど』

元のセカイで初めてリゼちゃんに会った時のことは今でも鮮明に覚えている。ラビットハウスに来た初日、制服に着替えようと更衣室に入ったとき、人の気配を感じてロッカーを開けたら下着姿のリゼちゃんが銃を持って隠れていたんだ。いきなり銃を突きつけられてお前は誰だ、ってまるでハードボイルドドラマみたいだった。最初は結構つんつんした武闘派っぽいイメージだったけど、すぐにかわいい物が好きだってわかって、みんなで旅行に行く直前の頃なんかは、やさしいお姉ちゃん先生だったね。

「とりあえず、サキさんの勧誘でリゼちゃんがラビットハウスにアルバイトしに来ることになりそう」

『もうそこまで話が進んだんだ。でもなんでサキさんはリゼちゃんを勧誘したんだろう』

「ずっと人手が足りなかったし、一目で尋常でない力持ちだと見抜いたんじゃ

ないかな。コーヒー豆一袋を軽々担いでたし」

『なんかひっかかるけど、まあ、リゼちゃんを仲間にできたからいいか』

「うん、なんか一歩進めた気がした」

『よし、これからも頑張っていこー！　で、聞いてくれる？　今日はバリスタとしてのお仕事の日だったんだけどね――」

それからまた一時間、ココアお姉さん（仮）の愚痴タイムになった。働く大人って大変なんだね……。

翌々日、リゼちゃんがラビットハウスで働き始める日が来た。先輩の店員としてみっちり仕事を教えていくよ！　学校が終わって一直線に家に帰り、部屋にかばんを置いて更衣室へ。まだリゼちゃんは来ていないみたい……ん？　誰かいる気配がする……これはやっぱり。二つ隣のロッカーの前に立ち、扉を開

け放った。
「リゼちゃん発見！」
「な!? 気配を殺していたはずなのに!?……お前は、ってココアか」
デジャヴュ、どころか、かつて私が経験したのとほとんど同じ光景だった。
見事に下着姿、たぶんデザインや色も同じような気がする。
「私には全部お見通し♪ さ、着替えちゃお？」
「あ、ああ」
二人並んで制服に着替え、ホールへ出る。
「リゼさん、今日からよろしくお願いするわね」
「よろしくお願いします！」
「敬礼、とても凛々しいわね♪ それで、見ての通り今は閑古鳥が鳴いているから、ゆっくりお仕事の説明をするわ」

サキさんの案内でお店の説明が始まった。ホールでの仕事、バックヤードでの仕事、役割分担などなど。

「これがカフェタイムのメニューよ。コーヒーの種類が多いから覚えるのが大変だと思うけど」

「覚えました！」

「はやっ！」

そうだった、リゼちゃんすぐにメニューを暗記できたんだった。

「あと、わからないことがあったら、私やタカヒロさん、ココアちゃんに聞いてね」

「お姉ちゃんにまかせなさい！」

「いや同い年だろ」

「遠慮しなくていいんだよリゼちゃん！　私が先輩、つまりお姉ちゃんも同然

だよ！」

「やっぱりお前馴れ馴れしいな……」

リゼちゃんに呆れられちゃった。それで、さっそく実地訓練と行きたいところだったけれど、もともと学校終わりからカフェタイムの終わりまでそんなに時間がないこともあって、私たちの仕事時間が終わるまでにお客さんは来なかった。リゼちゃんとふたりでお店をピカピカに磨き上げて上がり。

「私は基本、木曜と土日に仕事をする予定だ。よろしくな」

「私も同じ感じ。よろしくね！　あ、でも今度の土曜日は私は午前中だけだよ。ちょっと約束があって」

「サキさんから聞いた。午後は任せろ」

「お客さんに銃を向けないでね」

「お前の中で私はどんな扱いになっているんだ……あの時は悪かったよ」

「冗談、冗談。もう気にしてないから大丈夫！　リゼちゃんなら百人力だって信じてるから」
「期待に恥じないよう努力する」
「それでこそリゼちゃんだよ！　それで、今日夕ご飯一緒に食べない？　今日はタカヒロさんもサキさんもバータイムの方に出るから私一人だけなんだ」
「そうか……じゃあお邪魔しようかな。家の方には断りを入れておく」
うん、リゼちゃんも一緒だと腕が鳴るよ！　わくわくしてきちゃった！

リゼちゃんとのお料理会、開幕です。とはいえ、リゼちゃんはお客様なので席に座ってもらっています。
「今日はカレーを作ります！」
「私は手伝わなくていいのか？」

「今日は私が手料理をふるまいます！　リゼちゃんには今度ハンバーグフルコースを作ってもらうから！」
「ハンバーグフルコースってなんだ？　いやまあ料理はひと通り作れるが」
「知ってるよ！」
「私の料理の腕も『知ってる』のか」
「異世界人だからね、ふぉっふぉっふぉっ」
「……もうココアが何を知っていても驚かないぞ」
「えへへ」
　リゼちゃんの料理はきめ細やかで、みんなの好みもばっちり把握してくれている。そしてとても美味しい！
　さて、私もそれに負けないように作り始めますか。
「ではここに、今朝タカヒロさんが仕込んでおいてくれたカレーの完成品があ

ります！」

「おい待て！　材料が何もなくて寸胴鍋だけ置いてあるからなんか怪しいと思ったら！」

「ナイスツッコミ！　私はこれをきれいに盛り付けます」

「……」

リゼちゃんの視線がジトっとしたものに変わっちゃった。まあ、それはそうか。メインディッシュが他の人の手によって完成されているし。

「あ、でもサラダは作るよ？　今日は生野菜をきれいに盛り付けるだけなんだけど、ドレッシングは私特製です」

「……まあ、盛り付けやドレッシング作りも立派な料理だしな、ココアの本格的な腕の披露はまた今度ということで」

というわけで、二人分のドレッシング作りをスタート。材料を用意して小さ

めのボウルに順序良く加えて混ぜていると、リゼちゃんがそばに来た。
「どんなドレッシングを作るんだ？」
「ココア流究極のドレッシングだよ！　はい味見どうぞ！」
「どれどれ……お、うまいな」
「でしょ♪」
私とリゼちゃんの二人分、カレーをよそい、サラダを盛り付け、リゼちゃんお墨付きのドレッシングを添えて食卓の準備ができた。
「それでは、ちょっと時間が早いけどいただきます！」
「いただきます」
カレーを一口。うん、やっぱりタカヒロさんの味は超一流だね！
「……今までで一番おいしい」
「でしょ？」

「うん、おいしい。味が最高なのはもちろんだけど、こうして誰かと食事を共にするというのも、久しぶりだしな」
「そうなの？」
「父は忙しいし、母は不在だから、家での食事は大体独りなんだ。たまに同い年のボディーガードと食事をすることはあるけれど」
「じゃあ、うちにご飯食べに来ない？　私が一人のときは一緒だと嬉しいし、サキさんも来るともっと楽しいし、いいことずくめだよ」
「いいのか？」
「うん、大歓迎だよ！」
「じゃあ、私がアルバイトに来る日の夕食は、一緒に食べていいか？」
「わかった！　毎日でも大丈夫だからいつでも来ていいよ！」
「そっか……ありがとう」

食べ終わった食器を片付け、リゼちゃんを見送ってからお風呂に入った。お湯につかってリラックスしながら、今日のことを振り返る。今日一日だけで、だいぶリゼちゃんと打ち解けられた気がする。ただ、何かを思い出した様子はまだ感じられなかった。記憶を取り戻してもらうために必要なものは何だろう。何かあるのかな。ココアお姉さん（仮）が言っていたように、元々のセカイを追体験するように進めていくしかないのかな。ひとまず更衣室での遭遇イベントはできた。次は……ラテアートの練習かな。一緒にパン作りとかも。うん、ちょっとわくわくしてきたよ。

スケジュール帳に記録して、今日のところはおしまい。宿題しなきゃ。

土曜日、リゼちゃんの本格デビューの日。開店と同時にお客さんが一組、また一組と来て、一時間もたたないうちに席が大体埋まった。私とリゼちゃんで

注文を取り、タカヒロさんとサキさんがコーヒーを入れたり食べ物を作ったりする、いつもの分担。リゼちゃんは初めてなのにとてもスムーズに仕事をこなし、連携も万全だった。

「すごいねリゼちゃん！　初日から一流だよ！」

「私でもびっくりだ。なんだかとてもしっくりくる。まるで昔から働いていたみたいだ」

もしかしたら、意識の奥底にきちんとラビットハウスでのお仕事の記憶が眠っているのかも。

お客さんがひと段落したら、ちょうどお昼だった。青山さんとの約束は午後二時なので、もう少し時間があるね。

「サキさん、ちょっとカウンター借りていいかな？　リゼちゃん、ラテアートづくりしてみない？」

「ラテアートか……私にできるかな」
「できるよ！」
私の最初のラテアートは、リゼちゃんに笑われた思い出がある。後から聞いたら、おかしくて笑ったんじゃなくて、かわいさに心を撃ち抜かれていたんだって。ちょっと嬉しかった。
「何を描いたらいいんだ？」
「やっぱり基本はハートマークかな。うさぎさんもいいと思うし、……そうだ、戦車とか描いてみたら？」
「さすがに戦車は無理だろ……」
「そっかー」
「ちなみにココアはどんなラテアートを描けるんだ」
「うん、今から修行の成果を見せてあげる！」

だてに二年間喫茶店の店員をやってきてないよ。描くものはこれに決めた！

「できた！」
「どれどれ……ひょっとして、これ私か？」
「うん、リゼちゃんだよ！　そしてこっちはロゼちゃん！」
リゼちゃんのふたつの姿を描いてみました。普通のリゼちゃんモードは、ラビットハウスの制服でかっこよく銃を構えたモード、ロゼちゃんモードの方は美しくかわいく仕上げました！
「うまいな……人間業じゃないみたいだ」
「リゼちゃんもできるようになるよ！」
「そうか。さすがにいきなり似顔絵は無理だから、まずはうさぎにするか。なんかホールの片隅でぽよんぽよんしているあの毛玉っぽいやつとか」

「あれティッピーっていうの！」
「よし、ティッピーを描いてみるか」
リゼちゃんのラテアートチャレンジ、スタート。これも奥底の記憶のなせる業なのか、すいすいとティッピーを描き出していく。
「よし、これで完成かな」
「すごい、もこもこの毛並みまできれいに表現してる！　しかも速い！　リゼちゃんこそ人間業じゃないよ～」
「いや～そんなことないぞ」
言葉では謙遜しつつも、うれしさがにじみ出ている表情だね。
「あら、ティッピーちゃんの可愛いラテアート！　あとリゼさんと……こちらもリゼさん？　三つとも写真に撮っていい？」
「いいよ！」

サキさんがやってきて、私とリゼちゃんの力作を写真に撮ってくれた。

「あら～麗しいラテアートですね～」

聞きなれたのんびりした声が背後から聞こえた。

「青山さん⁉　いつの間に？」

「先ほど来ました～」

「改めて紹介するね！　こちら新人のリゼちゃん！　こちらは常連の青山さん！」

「よろしくお願いします」

「青山と申します。よろしくお願いします～」

「青山さんは小説家なんだ！　青山ブルーマウンテンさんっていうの！」

「そういえば本屋で本を見かけたことがあるような……あ、もしかして雑誌に

も連載してたり」
「グルメガイドを少々～」
「なるほど」
「このあとココアさんをお借りしますね。まだ少し時間がありますから、そうですね～、カフェラテをお願いします」
「かしこまりました！」
青山さんには青山さんの似顔絵入りカフェラテを作って持って行った。
「私の顔があるとちょっと飲みづらいですね～目が合うとちょっと恥ずかしくなります～」
「あはは……」

二時前になったので、あとはリゼちゃんに任せてお仕事上がり。青山さんと

一緒にラビットハウスを出て、本日の会場へ。おしゃれなカフェのテラス席に案内された。

「初夏のさわやかな陽気のときは、こうしたテラスで楽しむのもいいものです」

「うん、いい感じ！　ラビットハウスにもテラス席作ってみたくなったよ！今度サキさんとタカヒロさんに提案してみる！」

「いいですね、楽しみにしてます」

アフタヌーンティーセットが届いたところで、今日の本題に入った。

「リゼさん、私の直感では『勇壮なレディ』という感じがしました～」

「うん、まさにそんな感じ！　とてもかっこよくて、でもかわいいんだ！」

「なるほど～」

アフタヌーンティーというと、最初はどうやって味わうのか作法がわからな

くて、チノちゃんマヤちゃんメグちゃんの前で相対性理論をなんとかかんとか言って取り繕おうとしたのを思い出す。結局のところ、テーブルについているみんなが楽しめればなんだっていいということを学んだ。というわけで、自分がいちばんおいしいと思える感じに料理と紅茶を味わうよ。うん、おいしい！

「まず、私が現状についてどの程度、私の頭の中に情報があるかをお話しますね」

青山さんがそう切り出した。私は少し身を乗り出すような感じになって話を聞き始めた。

「ラビットハウスで私が話した言葉でお気づきかもしれませんが、私の記憶は、おそらくココアさんが前のセカイで話してくださったことがそのまま存在しています。そう、私が以前、『Kigumi-F』と名付けたセカイでの会話です。そして、リゼさんの存在が自然なものとして認識されています」

「全部覚えてるの!?」

「その可能性が高いです。ただ、リゼさんの存在を認知した瞬間というのが存在していなくて、以前から存在していたかのような記憶になっていますので、やはり、世界線が変わったときに何らかの影響を受けているようです」

「そうなんだ……。私は『まじゅつ』っぽいものを使ったときに、なんか変わるような、ヘンな力の流れを感じたんだ。私にも突然記憶が書き換わったような感じはないんだけど、セカイが変わったときに影響を受けたのかな」

「そうですね、ココアさんの場合は、ココアさんを基点としていろいろな事象を起こしているので、影響は受けていないのではないかと思います。あるいは、ココアさん自身が何らかの影響を受けているかどうか、並行世界のココアさんから観測した場合は、なにかわかるかもしれません」

「そっか、並行世界の私に聞いてみるという手があるんだ……」

並行世界の私、ココアお姉さん（仮）の話が思い出された。たしか、私がもともといた世界が分裂してしまったのが見えたから、私に向けてコンタクトを取ってきてくれたんだっけ。

「Kigumi-F の世界と、リゼさんがいる世界が一緒になったときに、Kigumi-F の世界がまだ存在し続けているのか、それとも、二つの世界が一つに合流したのか、そのことも並行世界のココアさんからなら見えるかもしれませんね」

並行世界のココアさんともお話ししてみたいものです、青山さんはそう締めくくった。

次は私が知っていることを話す番。紅茶を一口飲み、話し始めた。

「ここ何日かの間にね、リゼちゃんと一緒にご飯を食べたり、昨日と今日はラビットハウスで一緒にお仕事してみたんだけど、リゼちゃんの動きが元のセカイの感じに似てたんだ。バックヤードの更衣室で隠れていたときの仕草とか、

お仕事のときの身のこなしとか、ラテアートを作る時の腕前だとか。リゼちゃんは何ひとつ覚えていないって言ってたんだけど」

「なるほど。もしかしたら、記憶の奥底、潜在意識の中に、元のセカイのことが刻み込まれていて、それが立ち居振る舞いに表われているかもしれません」

「うん。私もそう感じてた。ということは、記憶が戻る可能性が高い……？」

「その可能性が高いと思われます。ずっと、元のセカイと同じような感じの場面が現れたときに、できるだけ元のセカイの通りのことをすることが鍵になりそうです」

「なんか、希望が出てきたよ」

「よかったです～」

少し心が晴れやかになって、ここからは雑談タイム。紅茶とスイーツ、軽食を味わいながら、木組みの街のことについて語り合いました。

「ところで青山さん、私を題材にした小説、進展はありましたか？」
「珍しく、というと聞こえが良くないのですが、久しぶりに筆がスイスイ進んでおります～。今日のお話を聞けてますます展開がふくらみました」
「よかったです！　完成したら一番に読ませてね！」
「わかりました～」
　いつの間にか日が傾いていた。リゼちゃんの記憶を一日でも早く取り戻すため、頑張ろう。

「ただいまーっ」
「おかえりココア。私はもうすぐ上がるところだ」
「ありがとうリゼちゃん。お仕事どうだった？」
「とても順調でよかったわ♪」

リゼちゃんのお仕事はサキさんのお墨付きになったみたい。私もお仕事がんばろう。

「上がったら着替えて私の部屋で待ってて！　階段を一番上まで登ったところだから！」

「？　ココアは？」

「今日は本当に私の腕によりをかけて豪華なディナーを作ります！　……サキさんのアシスタントだけどね」

「私は手伝わなくていいのか？」

「いいよいいよ、今度手伝ってもらうかもだけど」

「わかった、今度私の腕も披露しよう」

「ハンバーグフルコースね！」

「だからハンバーグフルコースってなんだよ……」

苦笑するリゼちゃんがバックヤードに行くのを見送り、いったん表の看板を「準備中」に変えた。今から少しお掃除とグラスの準備をして、バータイムの営業に備えるおしごとです。

「それじゃココアちゃん、夕食を仕込みましょうか」

「はい！」

「カレーがあるし、ココアちゃんの希望どおりハンバーグフルコースを添えちゃおうかしら」

「添えるというより主役になっちゃうんじゃ……」

「それもそうね♪」

でもハンバーグを作るのは本当だった。冷蔵庫からミンチを取り出してこね、つなぎや調味料を混ぜ合わせて整えていく。四人分ともあって分量は多い……あれ、なんかどうみても八人分くらいありそうな気がする。

「サキさん、なんか多くないですか？　明日の分が一緒だとしても結構量があるような……」

「なんとなくだけど、リゼさんはたくさん食べそうな気がしたの。がおー皿まで食べちゃうぞーみたいな」

「そうかな……？」

リゼちゃんは軍人さんみたいにきっちりしているから、食事もバランスの取れたものをきっちり量を守って摂っているんじゃないかなと思うんだけど。でもふと思った。たくさんのセカイがあるのなら、その中にはリゼちゃんが暴食の限りを尽くしているセカイだってあるのかもしれない。もしかしたら今のリゼちゃんも、まだ記憶が元通りになっているわけではなさそうだし、節制もそんなに厳しくなかったりするのかも。

八人分を焼き上げるために、フライパンを三回使うはめになった。そして私

のお仕事はゼロになってしまいそうだったので、あわてて料理道具の洗い物とお皿の準備をした。

リゼちゃんを呼びに自分の部屋に行くと、リゼちゃんの口がもごもご動いていた。

「リゼちゃんなに食べてるのー？」

「えっ、あっココア違うんだ、おなかが空きすぎたから持ってきてたレーションに手をつけてしまったとかそういうことはないんだ！」

「あははっ、そんなにおなかが空いているリゼちゃんなら、ハンバーグカレーを四人前くらい食べられそうだね」

「さすがに四人前は無理だ……」

みんなでダイニングテーブルについて、夕食タイム。ハンバーグカレーと、つけ合わせは白和え。なんだろう、異文化折衷を感じなくもない食卓だった。

ちなみにリゼちゃんには大皿での提供です。たぶん二人前と少しくらい盛りつけてあったと思うんだけど、あっという間に平らげていた。よっぽどおなかが空いていたんだね。

「リゼさんみたいに元気に食べてくれるととても嬉しい！　お代わりもあるわよ」

「いや、さすがに遠慮しておきます……」

夜、リゼちゃんを見送ってからお風呂に入った。少しずつ進展があるのを感じているけど、かといってリゼちゃんの記憶を完全に取り戻すための決め手があるわけではなかった。ひたすら地道に記憶を追体験する形で続けていかないといけないのだろうか。いつまでに戻るだろうか。そして、リゼちゃんだけではない。みんなを見つけ出さないといけないから、他のみんなの手がかりも

探す必要があった。ココアお姉さん（仮）の力をさらに借りるときかもしれない。

少し火照ってきた感じがしたので、またのぼせちゃったりしないように早めに上がり、ぱたぱたと仰ぎながら自分の部屋に戻ってベッドに転がった。部屋の片隅、箱の中でちょこちょこと動くティッピーと、その横に置いているティッピーのぬいぐるみを見る。最近ココアお姉さん（仮）からの定時報告みたいな、単なる愚痴大会みたいな連絡がなかった。こちらから呼びかけてみても特に返事がない。もしかして過労で倒れてるんじゃ。胸騒ぎがしたのでティッピーに駆け寄って抱き上げて話しかけた。

「お姉ちゃん、生きてますか？」

『……うぅ、ふぁい、ココアですよー……誰か助けてー……っ……』

「何があったの！　何をしたらいい!?」

『その声は木組みの街の私だね……大丈夫、おなかが空きすぎてお店に行く力すら残されていないとかそんなことはないから……』
「こっちのリゼちゃんみたいなこと言わないで」
『あはは、チノちゃんが昨日今日と出張でね、ごはんを忘れて仕事と研究をしていたら、まあ電池切れってわけ』
「あっ、そうだハンバーグがいっぱいあるから食べさせてあげる！」
『どうやって？』
あ……そうだ、あっちのセカイとこっちのセカイ、物のやり取りなんてしたことなかったし、そもそもできないのかもしれなかった。
『ありがとう、気持ちだけいただいておくよ。ちょうどチノちゃんが帰ってきたから、もう大丈夫だと思う』
「良かった……」

『そうそう、明日の夜までにはいい報告ができそうだよ。お楽しみに……あ、チノちゃんお帰り、大丈夫おなかが空いただけだから泣かないで、え、あっクッションアタックはやめてぐーもやめて……っ』

なにやら争いの声とともに通話が切れた。明日の報告ってなんだろうと思いつつ、今日の様子をノートに書いて眠りについた。

「おはよーココア、ん、おーい、ココアー」

「ん……はっ！　おはよいいんちょ……」

次の日の学校への行きがけ、ぼーっとしていたみたい。委員長に肩をたたかれてようやく我に返った。今日は長いこと発見できていない、千夜ちゃんの新しい手がかりを探してみようかな。

「ココア、なんかまた悩みを抱えている気がするなあ？」

「そっ、そんなことないよっ!?」
「その顔はウソをついている顔だね、知ってる？　ウソをつくときのココアって視線が左上の方を向くんだよ」
「……やっぱり委員長にはかなわないや」
「委員長だからね、あと大切な親友のことだからね。そりゃあ見抜けないものはないってこと。今日放課後時間ある？　またツラ貸しな？」
「いえっさー！」
放課後、委員長とカノちゃん、なっちゃんとともに、フルール・ド・ラパンにやって来た。お店に入ると綺麗なお姉さんが出迎えてくれた。
「いらっしゃいませ。フルール・ド・ラパンへようこそ。……あらマイちゃん、今日もお仕事に来たの？　感心感心」
「店長、今日はお客として来たんですよ。友達と一緒に」

「みなさんもようこそ。今日のお代はマイちゃんにツケとくわね」
「ほんとっ、委員長ありがとう！」
「委員長ごっそさん」
「え、その、店長、殺生な～」
「ふふっ。大丈夫、さすがにタダにはできないけど、少しサービスしちゃおうかしら」
「……あははっ」
店長さん、委員長、カノちゃん、なっちゃんのボケとツッコミに思わず笑い声がもれた。
「実はね、大切な人……人たちを探してるんだ」
心を少し落ち着けたあと、みんなに話し始めた。気がついたら自分と一緒に

いるはずのみんなが世界からいなくなっていたこと、手がかりを探しまわっていること、ひょんなことから一人と再会したこと、その子は何ひとつ覚えていなかったけど、ラビットハウスで一緒に働いていること。さすがに平行世界の私のことや、自分自身が魔術めいたものを使ってリゼちゃんがいる世界とつないだことの説明ははしょった。

「そっか……ココア、ずっと探し続けてるんだね」

「うん。リゼちゃん――その見つかった子以外はまだなんだ。手掛かりは少しある感じなんだけど」

「やっぱりみんな遠い街に散らばってたりするの？」

「まあ、そんな感じ。自分ひとりだとなかなか遠くに行けないから、ラビットハウスのマスターやサキさん、あとお得意さんの青山さんに手伝ってもらうつもり」

この世界はとても広い。このあたりで一番大きい都会、“百の橋と輝きの都”に行くのでさえも半日がかりになる。もし近くにいなければ、街を越え、国を越え、そしてセカイを越え。なんとしてもみんなを取り戻さないといけない。

「私たちにもできることがあるなら何でも言ってね。手配書の似顔絵……を張り出すための掲示板作りなら任せろ。懸賞金は無理だけど」

「そうだ、占いで人探しができるかな？」

みんなの特技を最大限に活かした手伝いの言葉に、思わず目から汗がこぼれた。……汗だよ。ハーブティーがちょっと熱かったの。

「そうね。どんなことでも力になれるから、なんならこうやってみんなを招集するといいよ。レイちゃんとかあんずちゃんとかも呼んでさ」

「ありがとう」

ラビットハウスに帰ると、ティッピーがぴょこぴょこ跳ねていた。

「ココアちゃんお帰りなさい。ティッピーちゃんが今日はいつもよりたくさんぴょんぴょんしているの。何かあったのかしら」
「うーん、なんだろう。ちょっと調べてみます！」
ティッピーを連れて部屋に入るやいなや、ココアお姉さん（仮）の声が響いてきた。
『ビッグニュース！　千夜ちゃんの居場所がわかりました！　あとリゼちゃんの記憶を取り戻せそうな鍵もわかったよ！』
「うええっ!?」
突然の大きな進展だった。

『まず、千夜ちゃんについて。千夜ちゃんは別の平行世界で、ご両親と一緒に“百の橋と輝きの都”に住んでいることがわかった。セカイを接続するために

必要な手掛かりは、千夜ちゃんのネーミング案が書かれた指南書が使える』
「待って、メモする」
ノートを開いてさらさらとペンを走らせる。書き留めていく間も、嬉しさのあまり手が震えて字がゆがみそうになった。
「メモできたよ」
『おっけー、次にリゼちゃんの記憶を取り戻す方法だけど、木組みの街を回ってふたつのものを見つつ、最後に紅茶を飲むと成功するって』
「三つのものって？」
『甘兎庵のあんこ、アクセサリーショップの髪留め』
「わかった。紅茶ってなんでもいいの？」
『どれでもいいけれど、一番効果があるのはひとつ』
テデザリゼ。リゼちゃんと同じ名前の紅茶だった。

『そっちのセカイでは手に入れにくかったんだっけ』
「……ある」
『あ、そうか。少し前に喫茶店で分けてもらったって言ってたね』
「うん。いつでも淹れられるように気をつけて保管してる」
『完璧。今週末、まずリゼちゃんの記憶を取り戻す方からやろう』
「うん！」

週末、サキさんに頼んでリゼちゃんともども休みにしてもらった。リゼちゃんには予定通りラビットハウスに来てもらうことにして、それから街めぐりに出発する。
「おはようココア」
「あ、リゼちゃんおはよう！　突然ごめんね！」

「いきなりデートみたいな誘いだったから、ちょっとどきっとした」
「えへへ……」
勢いのままリゼちゃんにメッセージを送って誘ったところ、リゼちゃんから半ば呆れた感じの顔文字とともに『まるで誰かをデートに誘うような勢いだな』と言われた。ある意味デートかもしれない。大切な仲間であり、これからみんなを探していくときの大切なパートナーと、ずっと一緒に行くから。
「それじゃ行こっか」
ラビットハウスを出て、甘兎庵の方へ行く。街は今日も賑やかで、通りや店は人で混みあっていた。
「ここ最近、週末はラビットハウスで働いているから、こうして週末の街を見るのは久しぶりだな」
「そうだねー」

「思わず買い食いしたくなるな」
「ちゃんとお財布持ってきた？」
「ああ抜かりな……な、あれ？　ここに入れてたはずなのに」
リゼちゃんがバッグの中を見ていますが、どうやら無いみたい。
「忘れてきちゃった？」
「……みたいだ」
「じゃあ先にリゼちゃんちに行こう！」
「すまない」
針路変更、先にリゼちゃんちへお財布を取りに行きます。
「門の前で待たせるのも悪いし、とりあえず家のほうまで行こう」
門の両脇は、前も見たボディーガードさんによって固められていた。
「こんにちは！」

「こんにちは……ああいつぞやのお嬢さんですかい。お元気でしたか？」
「はい！」
「ココア行くぞー」
「あ、待ってー」
リゼちゃんが奥に行き、私は玄関で待とうとしたところ、メイドさんの案内で玄関脇の応接室みたいなところに通された。
「え、あの、リゼちゃんのお財布を取りに来ただけで」
「はい、伺っております」
メイドさんの姿を良く見ると、自分とほとんど年の頃が変わらなかった。
「……リゼはしばらく来ないと思うよー、ちょっと部屋に細工しといたから」
「へ、細工？」
「あなたとちょっとお話をしてみたかったの。保登心愛さん？」

目の前のメイドさんがニヤリと笑った。

「私はユラ。単刀直入に言うと、リゼとあなたが初めて会ったときに、あなたの意識を刈り取った」

「あれユラちゃんだったの⁉」

「『ユラちゃん』ね、まあいいよ。あなたのおかげだと思うけど、リゼはここ何週間かで一気に丸くなった。正直、嫉妬するくらいに」

「嫉妬？」

「正直なところ、あなたをリゼから引きはがそうと思ったこともあったけど、そうするとリゼが悲しむものね」

ユラちゃんはしみじみと語った。

「ユラちゃんはさ、リゼちゃんと小さい頃からお友達だったの？」

「友達……とはちょっと違うかな。主人と従者みたいな感じが近いかも」
「なるほど……ユラちゃんはリゼちゃんの騎士さんなんだね」
「騎士かー、私はそんなにかっこいいものじゃないよ」
そう話したユラちゃんの顔は少し翳っていた。
「ココアちゃん、リゼと仲良くしてやってね。リゼを悲しませたら地の果てまで追いつめて……ふふ……」
ユラちゃん、笑顔だけど怖い。
「おーいココアー？　どこだー？」
リゼちゃんの声が聞こえたとき、ユラちゃんがドアの方に歩いていって開けた。
「リゼー、ココアちゃんならこっちに案内しといたー。まったくお客さんを玄関先で待たせるんじゃないぞー」

「ああすまない。すぐ取ってきて戻るはずだったんだが、どういうわけか変なところにしまいこんでしまっててさ」
「気をつけなよー」
直感が告げている。財布を隠したのがユラちゃんだとどこかで話したら、またプスっとやられそうな気がする。
ユラちゃんに見送られて、リゼちゃんとのおでかけ再開。甘兎庵へ向かった。

甘兎庵では、おばあちゃんとあんこが迎えてくれた。
「すごい深淵を感じさせる目のうさぎだなコイツ」
「あんこって言うんだ」
「よく来たね！　今日は何にするかい？」

「お団子ください！　私とリゼちゃんで二本ずつ！」
「おや、今日は十本でなくていいかい？」
「おばあちゃんそれリゼちゃんの前で言わないで！」
「かかっ、しっかり腹ごしらえできるのが一人前の証さ」
おばあちゃんが奥に引っ込むと、リゼちゃんが話しかけてきました。
「ずいぶん豪快なおばあさんだな……」
「うん、とてもいいおばあちゃんだよ！」
「しかしココアも結構食べるんだな。確か前も『黄金の鯱スペ――』
リゼちゃんが話しかけて固まった。
「……前？　いや、私がココアとここに来たのは初めてなはず……」
「あるよ」
「え？」

リゼちゃんが思い出しかけている。甘兎庵でこの感じなら、あと二箇所まわれば記憶が取り戻せるかもしれない。

「私とリゼちゃんとチノちゃんで、千夜ちゃんのいるこのお店に来たんだ。その時私が頼んだのが『黄金の鯱スペシャル』」

「……来たことあったんだな、『私』は」

そこまで言ったところでお団子が運ばれてきた。でもなぜか量がとても多い、お皿の上に山積みになっていた。

「あれ？　おばあちゃん二本ずつって」

「おやそうだったかい？　注文のとき両手の指を広げて『二本』って言ってたから、てっきり十二本だと思ったよ。そのまま置いてても仕方ないから持って帰りな！」

「おばあちゃんありがとう！」

思わぬ形でお土産をもらい、お団子を二本味わって、残りを包んでもらってから次のお店へ向かった。

アクセサリーショップが立ち並ぶ通り。私はここでシャロちゃんに出会ったりした。リゼちゃんにとっても記憶を取り戻すきっかけがあるはず。ココアお姉さん（仮）いわく、髪留めがその鍵らしい。ヘアアクセサリーを扱っているお店はどこかな。

「ココア！　ちょっとヘアピン見てもいいか？」

「うん！」

リゼちゃんが髪留めを取っては鏡に向かっていろいろ試している。

「なかなか似合わないのが悩みなんだよなー、マヤだったらいい感じに似合うん……だ……」

リゼちゃんがはっきりと口にした名前。
「マヤ……マ、ヤ……」
マヤちゃんはリゼちゃんに結構なついていた。このアクセサリーショップにもリゼちゃんとマヤちゃんに関する何か重要な縁があったに違いない。
「なあココア、『マヤ』というのも私たちの友達だったんだよな……」
「……そうだよ」
「そっか……」
リゼちゃんは髪留めをひとつ選んで包んでもらっていた。

その後、公園をまわってうさぎをもふもふし、ラビットハウスに戻ってきた。リゼちゃんを部屋に案内する。
「お待たせ。今日はちょっと趣向を変えて紅茶にしてみました」

「確かに珍しいな」
リゼちゃんが香りを味わう。そして一口。
「この感じ、あれかな。『テデザリゼ』、私と同じ名前だ」
「そうなの！　前行った喫茶店のマスターから頂いたんだー」
「うん。こう、癒され……」
リゼちゃんが固まり、カップをソーサーに置き、目を少し見開いた。口が震え、しかし声にならず、そして目から涙があふれてくるのが見えた。
「ココ……ア……」
「うん、ココアだよ」
「なあ、本当なのか？　今私の頭の中に突然現れた記憶……なあ……」
震え、そして続きを口にする。
「ココア、チノ、千夜、シャロ、マヤ、メグ……なあ、みんなはどこだ……？」

私は首を横に振った。
「まだわからない。でも手掛かりは少しずつつかめてる」
「私はずっと、みんなのことを、ココアのことを忘れていたというのか……？」
「大丈夫だよ。もう思い出してくれたんだから」
リゼちゃんが私の胸に飛び込んできた。さらに肩を震わせ、嗚咽を上げて泣き始めた。
「ココア……ココア……っ！」
「リゼちゃん……」
私の視界も涙でゆがんだ。ようやくひとり、こうして取り戻すことができた。しばらくの間、ふたりで泣き続けた。
「とりあえず、今は落ち着きたい。いろいろな話はまた明日ということにし

よう」
「そうだね。私ももうちょっと整理する必要があるから」
「それで、今日ここに泊まってもいいか」
「いいよ」
ちょっと荷物を取ってくる、そう言ってリゼちゃんはラビットハウスを出て、リゼちゃんちに向けて走っていった。

しばらくして戻ってきたリゼちゃんは、荷物をたくさん抱えていた。
「リゼちゃんどうしたの、そんな大荷物持って。まるで家出してきたみたい」
「ああ、家出した」
「うえええっ!?」
「冗談だ。でもしばらくラビットハウスの世話になることにした」

「どうして？」
「みんなを探し出すためには、私とココアが緊密に連携して捜索に当たることが大事だ。ココアと私は一心同体、バディというわけだ。バディは一緒に行動するものだ。それに……」
「それに？」
「……その、怖いんだ……今まで私はみんながいないセカイで、それに気づくことなく生きていたんだ。何かが起きて、ココアと、みんなと離れ離れになって、そのことにすら気がつかずに孤独に生きるのが怖い」
「リゼちゃん……」
「だから、しばらく一緒にいてくれないか」
「うん、わかった。いいよ。一緒にみんなを見つけ出そう」
「ありがとう」

リゼちゃんが差し出した手を、そっと握り返した。もう二度と離れないと誓って。

さて、さしあたり問題となるのが、リゼちゃんの寝床の確保だった。リゼせんせー家出事件のときはチノちゃんの部屋で寝泊まりしていたけど、現状、その部屋は住む人がいない空き部屋となっている。

「リゼちゃん、とりあえず私の部屋に布団敷くから、そこで一緒に寝よう？」

「私は別に床と屋根があればどこでも寝る訓練はしているが……」

「だーめ、寝られるときにきちんと寝て調子を万全に整えるのが一流の軍人さんだよ！」

「……そっか、そうだな。じゃあお言葉に甘えて」

「ちなみにさっきの言葉はタカヒロさんの受け売り」

「そうだろうと思った」

どちらからともなく笑った。これから、リゼちゃんとの共同生活が始まる。みんなを見つけるまで。次に見つけることができるのは誰だろう。

（『セカイにひとり』中巻第二号に続く）

# 第二部　ラビットハウス

## 新年ぱやぽや日記

# ラビットハウス新年ぱやぽや日記

長いような、短いような一年がまもなく終わります。今日のラビットハウスは喫茶店営業だけでバータイムはなく、明日から年明けの一月五日までお休みになります。一年の締めくくりなので、ココアさんとリゼさんには一時間だけ長く残ってもらって、私と父とともに、ホールやバックヤードの片付けと掃除に取り掛かりました。

「ふう、窓掃除終わったぞ」

「どれどれリゼちゃん……あら、窓の桟にほこりが残っていましてよ？ふーっ」

「お前なあ……」

ココアさんがいじわるお姉さんごっこをしています。リゼさんが磨き上げた窓はピカピカで、ほこり一つ残っていません。ちなみにココアさんはテーブルを拭き上げるお仕事をしていました。テーブルもつやつやになっており、完璧です。ココアさんもすっかりお掃除の達人になりました。

「ココアさん、茶番はいいのでバックヤードの片づけに行きますよ。リゼさんもお願いできますか」

「まかせてチノちゃん♪」

「おう」

バックヤードの倉庫は父によっていつも整頓されていますので、することといったら、おしぼりやコースターといった小物、コーヒー豆や茶葉などの食材の棚卸くらいです。こちらも日々父がきっちり在庫確認をしていますので、数量の違いはほとんど出ません。

「チノちゃん、キリマンジャロの残りはまるまる三袋と、一袋が三分の一くらいだよ」

「ブルーマウンテンは二袋と半分だな」

「マンデリンがあと一袋ですね、年が明けたら仕入れる必要があります」

そのほかの在庫や備品のチェックも、三人でするとあっという間に終わりました。ちなみに在庫はぴったり一致していました。さすが父です。

「この倉庫気持ちいいね、一年中快適に暮らせそう」

「食材の品質を最高に保たないといけませんからね」

以前父に聞いたところによると、壁や床、風の通り道に工夫をして、部屋の温度や湿度を一定に保てるようにしているそうです。

棚卸の結果をカウンターにいる父のところへ持っていき、今年のお仕事はすべて終わりとなりました。制服から私服に着替えるために更衣室へ行きます。

「制服はこのかごの中に入れてください。三人分まとめて明日洗濯しますので」

「洗濯してもらってすまない」

「一緒に洗濯しようね♪」

かごの中に入った三色の制服。何日か前に出した四色の制服とともに、クリスマスの時期にはみなさんがお店の中を駆け回りました。青山さんがその様子を見て「七色の魔法使いがお店の隅々まで幸せを運んでいますね～」と言ってくれました。私が魔法使いとはおこがましいですが、他のみなさんは本当に魔

法使いみたいでした。

「今年も一年お疲れさまでした！　また来年もよろしくお願いします！」
「よろしくお願いします」
「よろしくな」
　一年の締めくくりのあいさつをします。とはいえ、三十一日夜にもう一回、七人で集まってささやかなパーティーめいたものを開く予定です。
「じゃ、また明後日！」
「ばいばいリゼちゃん！」
「お気をつけて」
　リゼさんを見送って、私とココアさんは家に戻りました。
「そういえばココアさん、ご家族にお手紙は書いたんですか？」

「うん！　お母さんとお姉ちゃんの分は書き上げて、あとはお兄ちゃんたちとお父さんあての分！　写真も入れたら封筒がパンパンになっちゃった！」
「どんな写真を入れたんですか」
「えーとね、クリスマスの夜にみんなで撮った写真！」
「私が変な顔をした写真とか入っていませんよね？」
「大丈夫！　とびっきりかわいいチノちゃんの写真をお姉ちゃんセレクションで入れたよ」
「……そう言われると恥ずかしいです」
……私、うまく笑えていたでしょうか。
「来年はもっとかわいいチノちゃんを撮っちゃうぞ～、おー！」
でも、なんでしょう、みなさんと一緒なら……ココアさんと一緒なら、自然と笑顔になれそうな気がします。

◇　◇　◇　◇　◇

翌日、ココアさんと一緒に制服の洗濯をし、家の方の大掃除をしました。普段から整理整頓して綺麗に保つよう心がけていますが、やはり場所によっては結構ほこりが溜まっていたりしました。

「チノちゃん！　水回りの掃除は完璧だよ！」

「ありがとうございます。これで家の大掃除も終わりですね」

「よし、次は明日のパーティーの準備をしよう！　私の部屋とチノちゃんの部屋、どっちにする？」

「どうしましょうか……」

「あ、そうだ！　いいこと思いついたから私の部屋にしよう！　チノちゃんに

手伝ってもらって、夜にサプライズを仕込むんだ」
ココアさんお得意（？）のサプライズを用意してくれるらしいです。そうなると、明日の朝は起こしに行くことはできませんね。そう告げると、
「そうだね、チノちゃんは明日の朝は下で待っててね。ちゃんと自分で起きるから」
「期待してます」
そういえば、パーティーの準備といったら、何を用意したらいいんでしょうか。年末年始といえば……
「さっき千夜ちゃんからメッセージが来たんだけど、こたつで鍋パーティーしようって！」
「こたつ……うちにありましたっけ」
先ほど掃除した記憶をたどると、物置に何かあったような。ココアさんと一

緒に見に行くと、四角いテーブルと布団、敷物のセットが見つかりました。

「うん、これがこたつだよ」

物置からココアさんの部屋にこたつを持って行って広げ、さらに千夜さんからのアドバイスでみかんを上に積み、これでセッティングが完成しました。せっかくなのでこたつに入ってみます。

「あ〜〜〜〜〜、これは永遠に出られなくなる魔法の存在だね〜〜〜〜〜〜」

「そうですねー……」

千夜さんが先ほどメッセージで送ってきていた、『時を吸い人を捕らえる悪魔に気をつけなさい』というのは、もしかしてこのことだったのでしょうか。

このままでは永遠に出られなくなります。勢いをつけてこたつから飛び出し、丸くなって寝ていたココアさんを救い出しました。

「チノちゃーん、さーむーいー……」

「ここで寝ると取り返しがつかなくなる気がします。ちゃんとご飯を食べて、お風呂で温まってから寝ましょう」

こたつ、実におそろしいものです。

夜、寝ようとしたとき、ココアさんの部屋から何かどさどさと物音がしました。明日のサプライズの準備でしょう。どんなものが出てくるか楽しみです。

大掃除をしていた疲れもあって、あっという間に眠くなりました。

◇　◇　◇　◇　◇

翌日、十二月三十一日。一年の締めくくりの日です。午後から皆さんが集まってきました。でも、ココアさんがまだ部屋に入れてくれません。

「ココアさん？　まだですか？」
「ふっふっふ、慌てない、慌てない……これでよし。さあ、みんな入ってきて！」
　ようやく中に入ると、こたつの上に大きな箱が置かれていました。箱からは七本のひもが出てきています。
「ねえココアー、これなにー？」
「なんかくじみたい～」
「メグちゃん大当たり！　これはくじ引きだよ！」
　さあさあみんな手に取って！　ココアさんの誘いにみんながそれぞれひもを握り、一斉に引きました。すると……ひもの先に封筒がくっついて出てきました。
「あら、何かしら～？」

「開けてみてもいい？」
「うん、開けてみて！」
封筒を開くと、何かが書いてありました。
「えっと……『なべぶぎょう』……？」
「チノちゃん一等賞！　チノちゃんが鍋の支配者だよ！」
「私は『あくだいかん』？　これは何だ？」
「リゼちゃんは鍋を美味しくするため、あくを取ってもらいます！」
「私は『女王様』ね。みなのものくるしゅうない、おもてをあげい～」
「私は……『鍋を美味しく食べる人』、これは当たりなのかしら？」
「女王千夜様だ！　そしてシャロちゃんは遠慮なく食べてね！」
「あ、ありがとう……？」
謎の役割くじ引きの残りは、マヤさんが『美味しく食べる人その二』、メグ

さんが『美味しくなる魔法をかける人』、ココアさんが『カメラマン』でした。

「よーし、みんなの勇姿を撮っちゃうよ！」

なんだかよくわかりませんが、パーティーの始まりです。でも、『なべぶぎょう』が何をしたらいいのかわからないので固まっていると、千夜さんがそっと指南書を差し入れてくれました。

「えーっと、『この鍋は私が支配する。さからうものはもふもふの刑に処する』……？」

「「はは－っ」」

「……千夜さん、これは余分な言葉なのでは？」

「雰囲気作りは大事よ♪」

なんかうまく丸め込まれた気がしますが、指南書の通りに具材を入れていきましょう。私が具材を入れ、リゼさんがあくを取り、それを千夜さんが高いと

ころから眺めています。よく煮えた具材をよそい、メグさんのところで魔法をかけられ、シャロさんとマヤさん、次いで他のみんなのところに渡されます。その光景をココアさんがパシャパシャと撮っています。

「うん、いい感じだね」

「ココアちゃんもそろそろ食べたら？　冷めちゃうわ」

「うん！　じゃあいただきます！　うん、美味しい！」

みんなおなかいっぱいになったところで、今日はお開きとなりました。

「今年も一年お世話になりました！」

「「お世話になりました！」」

◇　◇　◇　◇　◇

新しい年を迎えました。実に良い天気で、今年もよい一年になりそうです。
「チノちゃんただいまーっ！」
「おかえりなさいココアさん。その包みは何ですか？」
「これ？　千夜ちゃんがくれたんだー」
新年早々お出かけしたココアさんが、お土産を持って帰ってきました。今度千夜さんにお礼しないといけませんね。その包みは四角くて細長く、まるでロールケーキでも入っていそうな感じでした。
「そういえば、なんとかロールケーキって言っていたような……？」
外側の包み紙を見ると、力強い文字で「極み酒」と書いてあります。
「これ、お酒の瓶なんじゃないですか」
「そうかなー……あ、すみっこに小さく『ロールケーキ』って書いてあるよ」
「ずいぶん変わった包みのロールケーキですね……」

「どれどれ……『アルコール分は微量ですので、お子様でも問題なくお召し上がりいただけます』だって！」

それでしたら、私たちでも問題なく食べられそうですね。とりあえず、おやつの時間まで冷蔵庫で冷やしておきましょう。

ラビットハウスは、私とココアさんが冬休みの間、もう少しだけお休みです。年末年始の休業期間を利用して、父が少しずつお店の修繕をしていました。お店が輝きを取り戻したような気がします。私とココアさんも少し手伝いました。

午後三時、クロスワードパズルに一区切りをつけてキッチンに降りていくと、すでにココアさんがロールケーキを切り分けてお皿に載せていました。

「早速食べようね！　お酒の香りがいい感じ～ほにゃ～」
「ココアさん酔っていませんか？」
「酔ってないよ大丈夫大丈夫！」
なんかいつもより三割増しでふわふわぽやぽやした雰囲気になっていますが、本当に大丈夫なんでしょうか。
「それでは、いただきます！」
「いただきます」
ココアさんの言うとおり、お酒の香りがいい感じです。ケーキを一口食べると、まろやかな甘さとお酒の風味が合わさって広がり、なんだか大人の味わいを……あ、なんだか身体がぽかぽかしてきました……
チノちゃんと一緒にケーキを食べました。うーん、なんか大人の世界に一歩

近づいた感じ！　お酒の香りだけで酔ってしまわないようにしなきゃね！　あれ、チノちゃんの様子がなんかほわほわしてる？

「チノちゃん、大丈夫？」

「うーん……あ、ココアさんだー」

「えっ」

チノちゃんがほわほわした笑顔とほわほわした声で抱きついてきちゃった！　確か前にもウイスキーボンボンを食べたときにこんな感じになっていたような。

「チノちゃーん、酔っちゃってる？」

「大丈夫れすよーココアさーん」

チノちゃんは酔っちゃってる間の行動をまるごと覚えているタイプだったから、チノちゃんが恥ずかしい思いをしないように寝かしつけないとね。お皿を

片付け、チノちゃんを部屋に連れて行って寝かそうとしたら、
「ココアさん行っちゃいやです、もっとお話したいです」
「えへへしかたないなー、どんなお話する？」
「すぅ……すぅ……」
チノちゃん、寝ちゃったね……じゃあお姉ちゃんは退散しますか。部屋を出るとき、チノちゃんの寝言が聞こえた。
「……ココアさん、大好きです……」
うん、お姉ちゃんもチノちゃんのことが大好きだよ！

◇　◇　◇　◇　◇

夕方、チノちゃんが起きてきて顔を赤くしながら私の部屋を尋ねてきま

した。

「ココアさん、あの……私変なこと言いませんでしたか？」

「うーん、どうだったかな？」

「変なこと言ってませんよね⁉　言ってたとしても忘れてください！」

「うん！　わかった！」

チノちゃんにちょっとだけ嘘をついた。絶対忘れないよ。大好きって言ってくれたこと。

（『ラビットハウス新年ぱやぽや日記』了）

# あとがき

はじめまして。あるいはお久しぶりです。麦と申します。インターネット上ではより詳しく識別するために「麦（穀物P）」と名乗ったりしています。

「セカイにひとり」中巻は、我が不徳の致すところにより発刊が半年以上遅れ、しかも分割刊行となりました。今回はその第一号をお送りします。現在のところ、第二号と第三号で中巻相当の部分を書き上げられる予定です。

中巻第一号では、リゼ先輩を捜索します。果たして無事に見つかるのでしょ

うか。

中巻第二号は今度こそ半年以内に出したいと思います。がんばります。

第二部には短編「ラビットハウス新年ぱやぽや日記」を収録しました。これは昨年の年末年始に公開した短編「年の瀬」と「ラビットハウス新年ぱやぽや日記」を合わせ、加筆したものになります。こちらもお楽しみいただければ幸いです。

麦（穀物Ｐ）

セカイにひとり　―遠く散ったみんなを探して―　中（一）

著　者：麦（穀物Ｐ）
発行元：麦之穂
サイト：https://muginoho.ehoh.net/
連絡先：mugi_grainp@protonmail.com
発行日：二〇二一年（令和三年）十二月三十日
印刷所：ちょ古っ都製本工房（https://www.chokotto.jp/）